

今週の為替相場見通し(2022年10月3日)

総括表		先週の値動き			今週の予想レンジ
		注	レンジ	終値	
米ドル	(円)		143.20 ~ 144.90	144.75	142.00 ~ 145.90
ユーロ	(ドル)		0.9528 ~ 0.9854	0.9800	0.9600 ~ 1.0000
(1ユーロ=)	(円)		137.39 ~ 142.31	141.98	138.50 ~ 143.00
英ポンド	(ドル)		1.0327 ~ 1.1235	1.1165	1.1000 ~ 1.1250
(1英ポンド=)	(円)	*	148.86 ~ 162.18	161.61	160.50 ~ 163.50
豪ドル	(ドル)		0.6364 ~ 0.6537	0.6411	0.6280 ~ 0.6600
(1豪ドル=)	(円)	*	92.13 ~ 94.22	92.65	92.00 ~ 94.50

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1. 米ドル

市場営業部 為替営業第二チーム 上遠野 暁洋

(1)今週の予想レンジ: 142.00 ~ 145.90 円

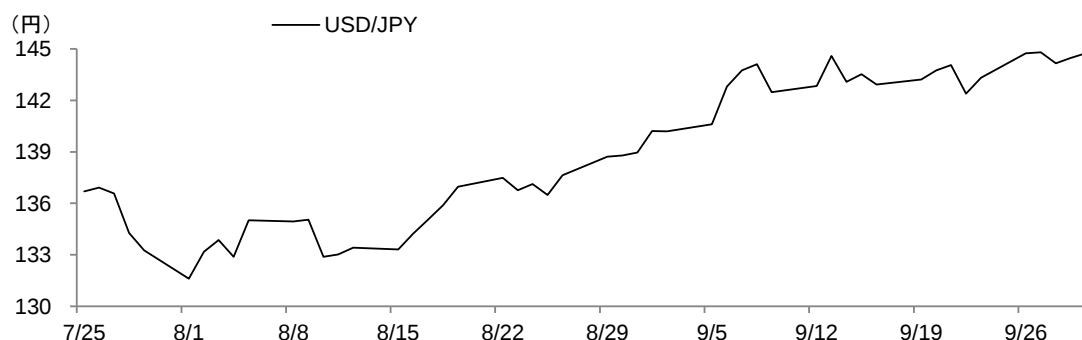
(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のドル/円は週初から上昇するも、週後半には145円を前に上値の重さが意識され144円台での方向感を探る内容となった。週初26日、シドニー時間に週安値143.20円をつけた後143.50円レベルで東京オープンしたドル/円は、英ポンドが財政悪化懸念から対ドルで過去最安値まで下落する流れにドル買いが強まり早々に144円台を回復し144円台後半まで上伸。翌27日は、144円台半ばを中心としたレンジ推移となるも、米9月コンファレンスボード消費者信頼感指数、新築住宅販売件数などの堅調結果を受けて144.90円と週高値まで上昇。28日は、米金利上昇や月末スポット日のドル/円買い需要にサポートされつつも、145円を前にした警戒感から144円台後半で推移した後、英中銀が長期債の一時買い入れを発表した後ポンドが乱高下する動きや英金利低下が米金利にも波及し、米金利がここもとの上昇を挫かれるとドル売りがやや優勢となり、144円台を割れ143.91円まで下落。もっともその後は144円台前半まで小反発し、翌29日も材料に乏しいながらも144円台半ばを中心としたレンジに回帰。30日も月末の実需ドル買いフローにサポートされ仲直にかけて上昇し上値を試すもレンジブレイクならず。その後海外時間、米8月PCEコアデフレーター(前年比)が市場予想を上回り米金利も上昇したことが好感され、ドル/円は144.81円まで上昇するも145円を前に失速し144.75円で越週。

今週のドル/円は底堅い展開を想定。先月FOMC後相次ぐFRB関係者のタカ派発言を受けた米金利の一段上昇、および他通貨の下落に伴い相対的なドル買いが強まる中、ドル/円は145円台での本邦政府・日銀の追加介入に警戒をしつつも、高値圏でのみみ合いを見ておきたい。前週のロンドン市場の混乱は小休止したもの、30日のトラス政権と予算責任局協議では財政計画の変更がないことが判明し英ポンドは失望売りとなり、英中銀が実施する長期債買い入れ期限が終了する14日以降への警戒感も根強い。またウクライナ情勢を巡っては、ロシアによるウクライナ東部4州の併合を受けて情勢が極めて緊張しており、欧州ではガスパイプライン破損による長期的なエネルギー供給不安も相まって、ユーロは引き続き軟調な値動きが想定されよう。また、人民元は元安阻止に向け国有銀行に対して介入準備を市場したとの報道から週後半は下落が一服するも、今週国慶節中の値動きは限定的か。斯かる中、米金利は株式市場の大幅下落を伴いながらも目先FRBによる大幅利上げを見越し上昇を継続しており、金利差やリスクオフを勘案したドル買いは継続とみる。今週は週末米9月雇用統計を控えており、ネガティブサプライズとならない限りはFRBの大幅利上げ路線は揺らがず、また週内も多く予定されているFRB関係者のタカ派発言も手掛かりにドルはサポートされやすいか。

(3)先週末までの相場の推移

先週(9/26~9/30)の値動き: 安値 143.20 円 高値 144.90 円 終値 144.75 円



(資料)ブルームバーグ

2. ユーロ

市場営業部 為替営業第一チーム 多川 昇吾

(1) 今週の予想レンジ: 0.9600 ~ 1.0000 138.50 ~ 143.00 円

(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のユーロ相場は週初に急落し、年初来安値を更新。週初26日、0.9690付近でオープンしたユーロ/ドルは英ポンドの急落に対ユーロでもドル買いが強まり、0.9528まで急落、年初来安値を更新した。ただ英中銀(BOE)が緊急声明を出し、ポンド安への対策措置を行うとの期待感から英ポンド買いが加速、ユーロ/ドルも連れ高となり0.97台を回復。その後は独9月IFO企業景況感指数の冴えない結果や米金利上昇もあり伸び悩んだ。27日、0.96台前半で揉み合っていたユーロ/ドルは米金利低下に伴うドル売りやポジション調整の動きから0.96台後半まで上伸も、その後は複数の米経済指標の良好な結果にドル買いが加速し、0.95台後半まで値を下げた。28日、上値の重い展開が続くユーロ/ドルは週初につけた安値圏付近までじりじりと下落も、その後はBOEの英国債購入の発表を背景に米金利も低下、ドル売りが加速し、0.97台半ばまで急伸した。29日、ユーロ/ドルは米金利の反転上昇や欧州株の冴えない動きが重しとなり、0.96台半ばまで値を落とすも、その後独9月CPIの強い結果や独金利上昇にユーロ買いが加速し、一時0.9815まで急上昇した。30日、米金利低下を背景に、ドル売りが強まりユーロ/ドルは週高値の0.9854まで上昇するも、英トラス政権による予算案変更はしないとの報道に、ポンド/ドルが反落する動きにユーロ/ドルもつれ安となる。その後買い戻され、0.98ちょうどで越週。

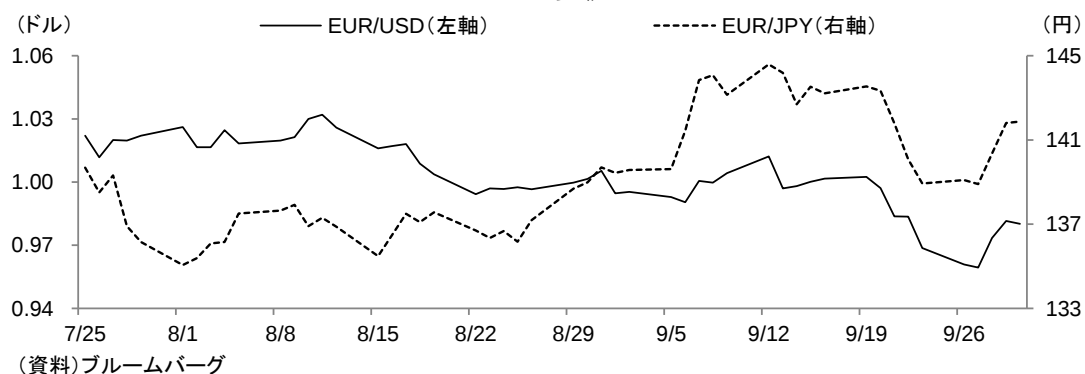
今週のユーロ相場は軟調推移を予想する。先週末発表されたユーロ圏9月CPI速報値は市場予想を上回り、前年比+10.0%に達した。この結果は、ECB政策委員会メンバーによる+75bp利上げを支持する発言とともに、市場がECBによる10月会合での利上げ織込みを+3回へ進めるインセンティブとなるだろう。しかしノルドストリーム損傷によるエネルギー供給不安の高まりや、英国財政の悪化懸念の問題をはじめ、ユーロ圏経済を取り巻く環境は依然厳しく、ECBによる大幅利上げが逆風となり、实体经济の悪化懸念が高まりやすくなる状況を考えると、ユーロ売りの流れが継続すると思われる。また、今週は3日(月)にユーロ圏9月製造業PMI、5日(水)ユーロ圏9月サービス業PMI、6日(木)ユーロ圏8月小売売上高の発表を予定しており、市場予想を下回る結果となれば、ユーロ売りに拍車がかかるシナリオが想定される。また、7日(金)米9月雇用統計が市場予想を上回る結果となれば、FRBによる一層の利上げ織込みが進むことが考えられるため、ユーロ相場の下押し圧力は強まると予想する。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(9/26~9/30)の値動き:

(対ドル) 安値 0.9528 高値 0.9854 終値 0.9800

(対円) 安値 137.39 高値 142.31 終値 141.98



3. 英ポンド

欧州資金部 本多 秀俊

(1) 今週の予想レンジ: 1.1000 ~ 1.1250 160.50 ~ 163.50 円

(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の英ポンド相場は、週明け直後の急落で対ドルの史上最安値を1.0327まで更新。その後、水準調整的な反発。週後半にかけて明確に水準を切り上げ、前週末比では、結局、主要通貨に対し全面高で引けた。週明け26日のポンド急落は、前週末(23日)にクアタング英財務相が発表した補正予算に対する反応。物価高騰に対する家計向け燃料補助金支給や社会保障費引き上げの撤回(増税の撤回=減税)などは、保守党党首選の間からトラス候補(当時)の目玉政策で、予想されていたところだったものの、個人所得税基礎税率の引き下げ(20→19%)、高額所得者の追加税率(45%)廃止などには意外感もあった。一連の追加財政出動は、「生活費危機」と言われる高インフレ環境にあって更なる物価押し上げ要因であるだけでなく、全額赤字国債の増発を財源とする点が「英財政破綻」への警戒感をあおり、ポンド急落につながった。ただし、この局面のポンド急落は、アジア時間朝という(ポンド為替の)流動性が極めて低い時間帯の値動きで、対ドルの史上最安値(1985年の1.0520)を割り込んだ水準におそらくあった損失確定のポンド売りが値幅を増幅させた可能性は考えられただろう。この局面、ポンドは対ユーロでも2020年9月来の安値を更新する0.9260まで急落したが、欧州勢が参入すると、特段の買い材料も見当たらない中、水準調整的な反発を見せた。その後、対ドルで1.0650~1.0850、対ユーロで0.8900~0.9000、対円で154~156円といった水準を中心とした横ばいを続けたポンドが、明確な上昇基調に転じたのは28日。英中銀が、上述財政破綻懸念を要因に暴落していた英長期国債市場に介入、「市場機能が回復するまで無制限に購入」する方針を示したことがきっかけとなった。英国債の急反発と並行して、ポンドも反発、週引けにかけて堅調推移を続け、高値圏で引ける前に、対ドルで1.1235、対ユーロで0.8753、対円で162.18円と、それぞれ週の高値まで反発した。

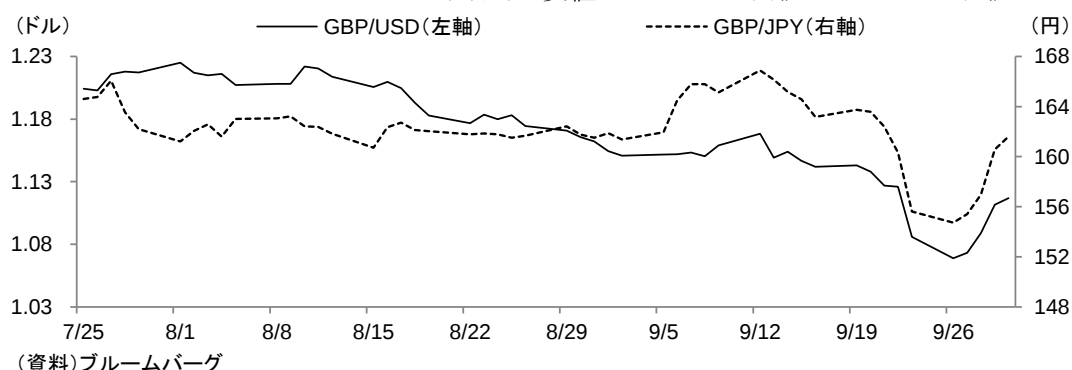
今週の英ポンド相場は、軟調気味の横ばいを予想。英長期国債市場の規模に鑑みて、英中銀が「無制限に購入する」と宣言した同市場が、近い将来、再び値崩れを起こす可能性は考え難いだろう。次の山場は、同銀が一旦延期した保有国債売却を開始する10月末ということになるのではない。ただし、国債市場と為替市場の値動きは、お互い影響を受け/与えながらも、必ずしも一致するものではない。事実、この間も、英国債の急落は英中銀が介入を発表する28日まで続いたが、ポンドは(英国債市場が開いていない)アジア時間朝に暴落して、早々に反発に転じてしまっている。ありがたなことだが、為替市場の方が材料に対する反応が速く、極端で、結果的に短期間に一巡するということであろう。ポンド軟調を警戒するのは、英財政破綻(IMF救済)や英政局流動化(トラス首相辞任と再びの政治的空白)に対する市場の懸念に、現時点で高くはないとはいえ、無視できない現実味が感じられるから。であれば、英国債市場の動向とは無関係に、それがポンドの重石となる可能性を警戒するのも現実味のある見通しと言えるのではない。また、英中銀の国債購入策は対症療法としてやむを得ない面はあるものの、政府財政政策の「尻拭い」をさせられた感は拭えず、中央銀行の政治からの独立性が問われるような事態になっているのもポンドには悪材料。早ければ今週中にもクワタング財務相更迭の可能性は考えられなくもないが、今般の政策判断の根底には、トラス首相自身の意向が大きく反映されているはずで、同首相が、万が一、「トカゲの尻尾切り」で難局を乗り切れると考えるなら、おそらく、通貨市場はポンド売りで応じることだろう。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(9/26~9/30)の値動き:

(対ドル) 安値 1.0327 高値 1.1235 終値 1.1165

(対円) 安値 148.86 高値 162.18 終値 161.61



4. 豪ドル

アジア・オセアニア資金部 シドニー室 川口 志保

(1) 今週の予想レンジ: 0.6280 ~ 0.6600 92.00 ~ 94.50 円

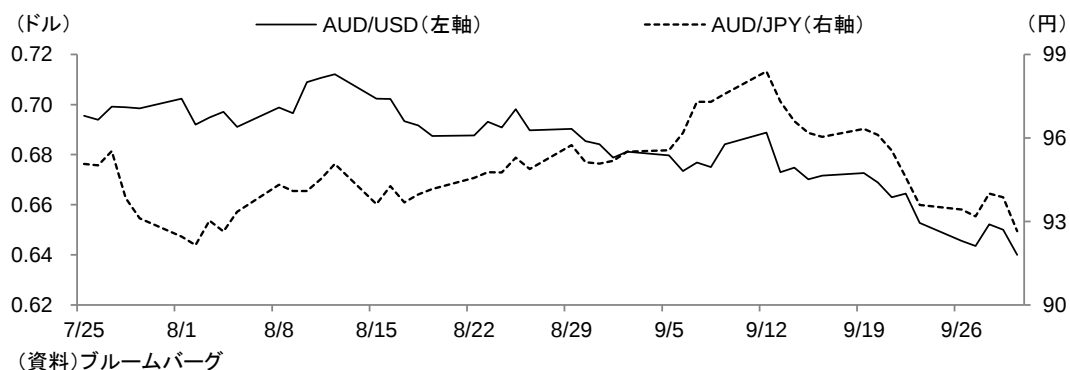
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の豪ドルは0.65台半ばからリスクオフの流れが継続し、2年5カ月ぶり安値0.6364を更新した。26日は各主要中銀高官のタカ派姿勢がリスク資産の重しとなり、安値を0.6438まで更新した。27日は複数の米金融当局者がタカ派姿勢を示した事で、過度な引き締めによる市場への打撃懸念が高まり更に安値を0.6414まで更新した。28日はドルの逃避需要でドルインデックスが過去最高値を記録。ドル買いの流れから豪ドルは再び安値を0.6364まで更新した。その後、英中銀が英国の大型減税を受けた市場の混乱を鎮静化する為、緊急国債購入を発表。英国債の急上昇を受けて米債も上昇し、米金利低下からドル売りとなり0.65台前半まで反発した。また、シドニー時間に発表された豪8月小売売上高は予想を上回り、前月比+0.6%増と過去最高を更新し、金利上昇に対する消費者の耐性が顕示された。一方で好調な統計を受けRBAが更に利上げを安心して継続する余地を与えた可能性もある。29日は0.6522でスタートし、0.64台前半まで下げて往って来い。ロンドン入りでは米金利の上昇に伴い、豪ドルは0.6436まで下落した。NY時間にかけては徐々に上方向に戻す動きも見られたが、複数の米金融当局者がタカ派姿勢を示したことで米株が大幅下落し、リスクオフの流れから豪ドルは上値を押さえられ0.65ちょうど近辺でNY引けとなった。30日は米8月個人消費の伸びが市場予想を上回った。ブレイナードFRB副議長がインフレが抑制されるまで利上げを継続するという米金融当局の姿勢を再度示した事がきっかけとなり米株S&P500が2年半以来の大幅下落を記録した。また、月末特有の米債売りもかき込み、米金利が上昇したことから豪ドルは再び0.64ちょうどを割り、0.6390まで下落した。

今週は引き続き頭の重い展開を予想する。4日(火)にRBA会合、5日(水)にRBNZ会合、5日に米9月ADP雇用統計、6日(木)に豪8月貿易収支、7日(金)にRBA半期金融安定化報告書発表、米9月雇用統計等が予定されている。先ず10月RBA政策理事会ではロウ総裁から「金利上昇に伴い利上げペースを緩和する」姿勢が改めて示される可能性が高く、今回+50bpの利上げが実施されたとしても豪ドル買いは限定的となる可能性が高い。米9月雇用統計では市場予想によれば雇用者数の伸びが緩やかににはなるが持続的な伸びが確認されるとされている。堅調な労働需要は賃金の伸びが高止まりするリスクも孕んでおり、現在の物価上昇局面でも人々の購買意欲がなおついてくるようであれば、インフレ抑制を目指すFRBは更にタカ派的にならざるを得なくなる。故に、予想通りとなれば経済打撃懸念が高まり、逃避需要からのドル買いが絶えない為、相対的に豪ドルは緩やかに押し下げられると予想する。但し、OPECによる大幅減産等のエネルギー供給制約に係る報道で豪ドルが持ち上げられる場面も想定される為、ヘッドラインにも注意を払いたい。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(9/26~9/30)の値動き: (対ドル) 安値 0.6364 高値 0.6537 終値 0.6411
(対円) 安値 92.13 高値 94.22 終値 92.65



当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。